あさ 2

2201

シジュウカラガン
千葉の親水公園で
初めて見た!!
一度日本で
絶滅したとの事
人為回復
しているらしい
珍しい鳥だ

須賀忠男

あさ

二月集

そばに

佐藤　竹僊

詰草にまた戻りくる小雨蝶

秋深む雨を上から地までみる

われもかうのそばにたたずむやうな人

銀木犀われの老ゆれば子も老ゆる

鶺鴒を連れて耕人振り向かず

練馬區も富士の裾野と霜柱

かぜあめは舊き友垣初氷

おばさんが床屋の椅子に日短

元朝の火鉢にかざす子の肌着

あかんぼは哺乳類なり初笑

風吹けば家雨降れば家こたつ猫

賀状書く

須賀敏子

天空へメタセコイヤの枯木かな
天を衝く櫟もすでに裸木に
プロペラの音の行方や枯木立
長考の駒動かせり寒椿
翡翠の止まりし杭や町師走
パンジーかビオラで迷ふ日曜日
一時間編んで形に冬りんご
自信無き筆跡なれど賀状書く

酉の市

田中藤穂

十二月もう一年が終るのか
蝉きかず虫鳴かず冬異変めく
冴え冴えと椎の上なる丸い月
流星群今夜見えるとニュース告ぐ
酉の市へ寄るといそいそ帰りけり

小春日

長崎桂子

黄葉にみせらるる思ひ出を暫し
銀杏を拾ふ家族や空は青
冬麗や今日の恵みを精一杯
極月やジビエ料理に笑み揃ふ
小春日やさくら堤に背を干す
西の空朱と木とけゆく冬夕べ
花もちや正月を愛で旅の事
厨して細々とあり年の市

雑詠

森なほ子

黄落の京は晴れても曇りても
人疎ら産寧坂の暮早し
苔に散る白山茶花や銀閣寺
鳩居堂瓦の上の冬三日月
谷深し清水寺は冬日浴び
極月や突き当りには東山
火の色と昭和を恋うて十二月

武道館

赤座典子

熱燗の鮎のしっぽをふうと吹く
福岡を走り納めの冬鴉
凍星の尖る瞬きガラスペン
映画評切り抜くだけの年暮るる
虹色の雲の縁取り小晦日
嬉嬉として孫を預かる年の末
サイリウムライトとマスクの五千人
二年ぶりの冬の宴の武道館

行ったり来たり

秋川泉

湯の宿へひたすら歩き冬紅葉
ロマンあるのか害虫なのか雪蛍
大量の綿虫飛びて今日は晴
愛育園夜の窓辺の虎落笛
花神楽鬼舞ふ中に友のあり
ツーリング角を曲がりて初時雨
北風やわあーっと走るランドセル
クリスマス猫に叱られてゐる夢

イルカ

大日向幸江

疎ましや院長回診寒い夜
小春日やいつもながらに入院中
弥勒菩薩手は頬に添へ雪雪雪
暖冬の湖に着水大白鳥
人は皆青い海住むイルカかな
ご飯ですよ駅弁売るごと看護士の
生れしは水の惑星この地球
トランペット突然なるや稲光

年の瀬

七郎衛門吉保

墓の木も雪囲ひする越後かな
芋羊羹のごとき畔冬の草
冬雲と白煙交叉仁王像
湯の谷にサイレン鳴らし火の用心
半年は長いトンネル雪の国
宇宙にも年の瀬あるや星の数
大晦日残る半日第九聴く
除夜の鐘一里響きて禍を飛ばせ

自然教育園

篠田純子

蒲の穂のモクと綿吹く日差しかな
倒木に並ぶ鴨五羽ひようたん池
白金の土塁や武蔵あぶみの実
ソオローオリ段差の見えぬ落葉道
藤穂女史の化粧待ちをり冬薔薇
義士の日の句会の隅にオミクロン
われもまた師走の歩幅日本橋

はたらきばち

篠田大佳

比喩上のはたらきばちの十二月
公園の芝生に莫蓙を敷き冬至
クリスマス大衆酒場結露せり
チップスのしんしん冷えてクリスマス
年賀スタンプ虎の可愛く猫に似る
揺れ鎮もり埃ゆつくり落つる冬

炉収集

また同じ焚火の底の地べたかな　佐藤　竹僊

そぞろ集まり放課後の暮易し　篠田　大佳

時々はナビを無視して冬の旅　須賀　敏子

縁側を羨む人と冬陽浴ぶ　田中　藤穂

冬の陽のぬくもり両手にて受ける

あれこれと思考の今日や日短に　長崎　桂子

ひんやりと触るる山茶花かくれんぼ　森　なほ子

シニヨンに銀のひとすぢ小春風　赤座　典子

十畳の炬燵開や中華まん　秋川　泉

帰宅せる夢を見た日の初涙　大日向幸江

冬の町見えるこの部屋家具はなし

今宵また殿様になる干蒲団　七郎衛門吉保

インバネス七郎衛門吉保ぞ　篠田　純子

冬羽田英語で煽るおにごつこ　篠田　大佳

龍の玉一寸転んだだけなのに　須賀　敏子

冬日和昏れて俄に風の音　田中　藤穂

燈明の合掌の間に火鉢欲す　長崎　桂子

黄落や夜の熟睡のため歩く　森　なほ子

観劇の火照りに寒夜心地良く　赤座　典子

ひげでんの鍋底にある厚大根　秋川　泉

木枯しや手の平返す温度計　七郎衛門吉保

喜茅抄

十二月号作品より　篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

秋澄めり鴉は聲を娯しめる　佐藤竹僊

ありそうでなさそうな声を作者は拾い上げます。絶対的な安全がこの鴉にはあるようです。ふざけたりじゃれたり、野生の鴉ではなかなか人の手に記録されにくい声ですが、飼育されている鴉ならあるいは人に記録させてくれるかもしれません。（大佳）

うすら氷にこども心と老ごころ　佐藤竹僊

12月27日、東京は「今季最低気温」との情報に、午前9時に日比谷公園の池の様子をを見に行きました。予想通り鶴のオブジェのある池は凍り、広げた鶴の翼から細い氷柱が垂れ光っています。凍った池の表面に、官庁街のビルの姿が、揺るぎなく映っています。「池に石を投げたら、面白かろう」と不意に思いました。掲句に、私の心を見透かされた思いがしました。（純子）

竜舌蘭静かに咲きぬ築地秋　篠田純子

築地の楓川の跡にできた首都高速道路の上に架かるいくつかの橋は公園になっています。公園それぞれに花壇があり、作者はそこに咲いた竜舌蘭を見に行きました。一部に写真を撮っている人はいましたが、多くの人はそんなに価値のあるものと感じないのか、無視していた光景を作者は句にしたようです。「静かに咲きぬ」に竜舌蘭の花の控えめな様子の実感も込められています。（大佳）

雨の道に蜻蛉掬ふやしがみつく　篠田純子

雨の道に「掬ふ」のだから雨水がたまった凹地であらう。生きてゐると分った作者は蜻蛉を掬ひ助け上げた。「しがみつく」がかわいい。生き物へのやさしさが現はれた一句。「雨の道に」の、には蛇足。（喜孝）

外濠の暗渠を鷺の浴みて秋　篠田大佳

都内の海べり、川べりにはよく鷺を見かけます。水道橋、飯田橋に外濠の暗渠が露出している所があり、時には鷺が漁をしています。暗渠の出口の暗さと、鷺の白さは映あい、その美しさに心惹かれます。（純子）

モデルかしら男女が歩き秋深む　篠田大佳

体形といひ、着てゐるものといひ、そして歩き方といひ理想的なカップルが眼前を横ぎっていく。

「秋深む」でしっとりとした光景が描かれた。（喜孝）

戦争はいつも置き去り実南天　　須賀敏子

戦争は人のコントロールを外れて、人の気持ちを置いていってしまいます。戦意だけが一人歩きする様子を詠んだものと思われます。南天の実の力強さが戦争の言葉の勇ましさを惹起させ、勢いに遅れる我々に溜息をつかせます。（大佳）

霧雨のなか野良猫はゆうゆうと　　田中藤穂

悲しみの感傷にある作者を前に野良猫は悠々と歩いています。雨をゆうゆうと進む野良猫のしなやかさに作者は驚き、その力強さを学んでいるように思います。悲しみは静かに、しかし確かに乗り越えられていくのでしょう。（大佳）

天と地の今朝は晴やか野菊咲く　　長崎桂子

気候をして天気と言わしめますが、天の気分も地の気分も晴れやかと作者は詠みます。地気というのか、土の顔色を読めるほど、作者の自然に対する感覚は鋭いものと想像します。そんないい気分の中に咲く野菊は大変穏やかなものと思われます。（大佳）

雑草のみな秋草となってゐる　　森なほ子

日本の植物や魚類などの分類は微に入り細に入りで、細かく名前がつけられているようです。その中で名前の付けられていない草が生長すると秋草の一つとなっていくのです。出世魚ならぬ出世草とでもいうのでしょうか。名のないものに名前が付く楽しさを掲句に感じました。（大佳）

家庭菜園瓜坊の穴四つ残る　　赤座典子

旅の題より掲句を引きます。旅枕にも生活があり、動物との共生、あるいは戦いが見られた発見があります。生活に普遍的な様子を旅という視点から見ている作者です。（大佳）

太陽も風の色にも今日は秋　　秋川　泉

五感を使って秋を感じている作者です。憂いや迷いもなく感じ取られた秋には、揺るぎない豊穣が約束されています。全ての人には過去があります。言語化されない過去を乗り越えて、迷いが消えた。それはとても幸せなことだと思います。（大佳）

金継の有田の皿に栗を盛る　　大日向幸江

日用と修繕を繰り返し、名器を大事に育てている作者です。金継の金色と栗の金色が映えあって、

栗の甘さがより引き立てられます。一日にして成らぬ栗の膳です。（大佳）

秋闌くや兄は備前に眠り入り　　七郎衛門吉保

秋の深まった時にご尊兄の霊が墓に入ったという句意と読みます。備前の地に同化した御霊は、土地の一部となって土地を豊かにする予感を「秋闌くや」の季語から感じ取れます。（大佳）

柿

干柿

黒澤佳子

柿の季節になると思い出す事があります。妹が奈良に住んでいた頃、裏庭に大きな柿の木が有り干柿にして送って呉れた事が有りました。手作りなので清潔で大粒の美味しかった事。この頃は催促もできず、お互いに七十代に成り寂しい限りです。

身不知柿

佐藤喜孝

ここに来るまでいろいろなところに住んだ。仕事場の近くに銀行の勧めで建売を買ったことがある。門扉から玄関先まで何間か歩く構造になってゐる。貧乏人の性、嬉しくて実の成る苗木を数本植ゑた。そのうちの一本が百目柿。桃栗三年柿八年といふが、よく覚えてゐないが数年で実が成った。苗木に当たったのだらう。数はもちろん期待はしてゐない。ただただ実が成るのが嬉しかった。妻は会津に疎開してゐた縁で身不知柿が大好物だった。今年は柿を箱買いして妻の前に並べてやった。

はしたて集

佐藤喜孝

田中藤穂

クリスマスコロナ終息ひた祈る
スカイツリー冬霧まとひつつ灯る

○誠にひつっこいコロナだこと。インフルエンザに効くタミフルのやうな薬がこのコロナにも出来るまで待たなければと、電話で敏子さんがお話されてゐた。このコロナも戦争と同じぐらいに考へもよいのかと思ふ位。いまは船が山を登ってゐるのだらうか。

○私がここへ越してからスカイツリーはテレビで見るだけとなった。工夫された照明はいつも見事である。冬霧をまとった姿を想像するだけでスカイツリーの楚々とした立ち姿が浮かぶ。下町に立ってゐることが一段と魅力的なのかなと思ふ。

長崎桂子

師走夫の命日慎みと回顧
残る雪二日ありしの不自由に

○残された者の思ひに終点はない。少々句の調べを軟らかくしてみた。「夫の命日慎み回顧十二月」。
○都会の人が、雪で右往左往するさまは雪国の人には噴飯ものだらう。私ももう雪が解けたらうと自転車で図書館に向かった。車が通ってゐる道はすいすいと通れたが、何故か一か所アイスバーンになってゐた。向こうから親子の自転車が三台下りて歩いた。わたしはあきらめて回り道をした。所がそっちの道はもっとひどくあきらめた。桂子さんの思ひを代弁できたかしら。

赤座典子

穏やかな義兄を送れり秋彼岸
本堂に控ふ手焙織部焼
若き僧の読経色無き風の中

○「義兄」はここでは「あに」と読む。送る人を一言でいへば「穏やかな人」として見送られた。
○お寺の本堂に石油ストーブが置いてあるより手焙が置かれてあることに典子さんは心がほんわかした。しかも織部焼とはと感動された。「控ふ」は読経が始まるのを待ってゐるのだとおもふ。私にはなんだか立派な火焙がそこに控えてゐるかに読んで楽しんだ。
○この句の「色なき風」は違和感がない。といふよりピッタリ。なかなかこの季語を使ひこなす事は難しいがよくここで使はれたと思った。（私のミスで十二月への投句分です。）

秋川　泉

手のひらにふはりと落ちし雪蛍
馬上より愛馬いたはる冬の暮

○「伸べる手の先へさきへと雪蛍　　笹村政子」といふ句がある。泉さんは幸運にか、差し伸べた手のひらに着地してくれた雪蛍。「落ちし」はある重量感を思ふ言葉。そして雪蛍の意思に反してといふ意味合いも生ずる。で「手のひらにふはりと雪蛍」でよいのだが何か物足りない。あとはよろしく。
○馬上よりがおもしろい。騎手が身をかがめて馬の首を愛撫しているさまがリアルだ。たまたまそ

のとき「冬の暮」だったのだらうが、この季語では愛馬と騎手の温かい交情が伝はりにくい。

大日向幸江

百台のスマホの待つや初日の出
亡き兄の「生きろ」と叫ぶ冬銀河

○スマホの機能の中のカメラを構へて初日の出を待つ。大勢の人が今かいまかと日の出を待つ。その人々の大半がスマホを構へてゐるのに幸江さんは驚かれたか。海なのだらうか、山なのだらうか。それとは違ふ所かもしれないが、「の待つや」といはず、初日の出を迎へる場の情景をｎ伝へるのもあり。

○幸江さんはどのやうな病名で入院されたのだらうか。（作品欄参照）掲句のやうに亡き兄の励ましで退院なされた。「冬銀河」をしみじみと受け止めた。

黒澤佳子

だし味のしみる玉子やおでん鍋
口紅も消えて街並マスクマスク

○私もおでんは好物。冬と云はず御厄介になる。おでんは作るのは無理なのでもっぱらレトルトだが、そこにゆで卵なら出来るので追加する。追加したゆで卵は簡単には出汁が染み込まない。二色のゆで卵の内食べるのは白いゆで卵から。句のゆで卵は美味しさうだ。

○佳子さんなかなか斬新な表現である。マスクの多さを「マスクマスク」とし、街中から女性の魅力的な風貌が消えてしまったことを「口紅が消えて」と象徴している。一句目とは違ふ人が作られたやうな作品。

七郎衛門吉保

皮剥くと氷河をみせしラ・フランス
ビル街も銀杏落葉ゴッホめく
夫と妻カレンダーのみクリスマス

○ラ・フランスの皮を剥いた時の果肉の状態を詠まれた。ラ・フランスを戴く時はこの句を思ひ出しながら注意して皮を剥くことにする。その時が楽しみだ。

○銀杏落葉の黄金色を敷き詰めた歩道。豪華な自然の絨緞で町の様子が一変する。あの光景をゴッホの描いた絵のやうだと詠はれた。

○昔はいざ知らずクリスマスといって取り立てて何もせず何も起こらず三百六十五分の一年が過ぎた。でも頭の中では昔日の様々な出来事を回想しての一句であらう。

篠田大佳

曇天のいてふもみぢのなほもみづ
凍光やワクチン液の濁りけり

○「いてふもみぢのなほもみづ」に意志の強さを見る。魅力的なフレーズだ。このフレーズに「曇り日」とせず「どんてん」と強く出て成功してゐる。

○「濁りけり」は、透明であったワクチン液が濁ってしまった、と読むことができる。がやはり初めから濁っていたのか、私も接種したがそこまで観察してゐなかった。ワクチンに対する一種の不安感の表出であらうか。

さて季語としての「凍光」である。手持ちの歳時記には未収録。ネットでは冬の季語とあるので私が時代についていけてないやうだ。「俳誌のサロン」の七万五千句のデータベースで調べたら『あを』に一句見つかった。

凍光や聞えてものの割るる音　　定梶じょう　（二〇一二年三月）

十年前にじょうさんは「凍光」を季語として作句されてをられた。迂闊であった。ひんやりとした不安感を覚える一句。

須賀敏子

寒肥す静かに話し掛けながら
半日を干して白菜漬けにけり

○二人で庭仕事をしてゐるとも読めるが、話し掛ける相手は人間ではなく寒肥を施してゐる草や木であらう。「静かに」実をつけるのよと言い聞かせたり、綺麗な花を見せてねと頼みこんだりしてゐる。しづかな午後である。

○私の母の世代は冬支度の一大イベントだったのだらう。縄で何株か括って売られてゐる白菜のイメージがあるが、今の四分の一に切られて売られる白菜を見たら驚かれることだらう。湯気の上がるご飯に半分凍った白菜漬が食べたくなった。

やぶにらみの記

―句集「青寫眞」に寄せて―

亀田虎童子

「青寫眞」は、谷の章をはじめとして、河、名、家、里、の五章からなる百九拾句ほどの句集である。各章は、や、かな、けり、という俳句への郷愁を秘めた喜孝さんの思いが罩められているようである．表紙に画かれた「青寫眞」の文字は裏返して印刷されておりその文字はまだ幼ないお嬢さんの書いたものである。まことにユニークな味合いをもった瀟洒な家集である。

喜孝さんどは、「二土の会」という支部結成以来のおつき合いであるから、かれこれ十年もの間、句会で顔を合わせてきたことになる。二土の会の発足の意味は、吾々の練成と実験的な作品を、あくまでも貪欲に、あくまでも冷静に検討することであった。二土の会の出席者のなかでは一番若いからということで、司会、進行などを引受けて貰っている。ひとなつこい笑顔と、ほんのすこし意地の悪いことをしてみたりする司会者であるが、誰もがこころ楽しい司会に馴染んできたようである。何年もの間、喜孝さんはひそかに実験的と思われる句を二土の会に投じてきた。実験的な句が直ぐ好意的に迎えられるとは限らないから、喜孝さんの句がいつもひかっていたというわけではなかった。もともと喜孝さんは、一句に執着していろいろ考えるタイプの作家であるから、どうしても寡作ということになる。己れを売りこもうとか、俳壇のなかですこしは好い顔をしてみたいという願望のない人であるから、他人の眼を意識するこ

となく、ひたすら自分の気に入った句作りを楽しんでいるようなところがある。二土の会の喜孝さんの句は、ときに楽しく、ときに驚ろかされ、ときには難解という苦渋さのなかへ曳きこまれるという多面性をもっていた。これはいわゆる俳句の典型をなぞるということのほかに、まだ広大な世界があるということの手がかりを探していることで、表面に平静さをよそおいながら、喜孝さんのひそかな覇気を思わすものがある。「青寫眞」を一読してみるとやはり喜孝さんには、この把え難い現代を何とかして表現しようとしている意志のようなものがみえる。また静かに澄みわたろうとする、いわば伝統的な句の世界と、いかにも喜孝さんらしいほのぼのとした向日的温かさといった庶民性がある。いいかえると、のっけから日常性を否定する立場のなかで、俳句型式の可能性に向っ９て問いかける喜孝さんと、いわゆる日常肯定に立った美意識のなかで創作するもうひとりの喜孝さんが存在しているのである。こういったことは多かすくなかれ誰にもあり得ることであろう。私はこのように混沌とした喜孝さんの句の表現の面白さに惹かれ、ながい間楽しく読み馴染んできた。だから、いまここで性急に「青寫眞」の評価を述べるということよりも、褒めたり貶したりしてきた喜孝さんを再確認するということになると思う。

鶏卵を頭ののあたりうちくだく
彈丸を摘出したる豆腐かな
広島を爪先きだちて通りすぐ

吟行にでかけると、喜孝さんはゆで卵を沢山もってくる。私も二度三度ご馳走になった。そんなことからも余程卵の好きな人であるらしい。「ゆづかれて卵の殻にうすわらひ」というまことにニヒルな感じのする好句をはじめ、卵の句はたくさんあった。掲出の句は過去も未来もつき放したような、瞬間的なつよい印象を受ける。一読して何の理由もなく恐怖感に襲われる。果して鶏卵の頭とは、頭のあたりとは何であろうか、などといろ詮索を超えて妙に胸騒ぎ

がする。弾丸の句は、「摘出したる」の中七の措辞がよく効いている。豆腐のなかから弾丸を摘出するという、現実にあり得ないことがらから、腑分けということを思いださせる。「青寫眞」の後序で高島茂さんは「白い豆腐のイメージが忽ち血に染まった人間の大脳に変る……」といっている。疼痛を帯びた、なまなましい弾丸が、いまピンセットに挟まれて皿の上にコトリと落される、そんな状景が感じられる。作者の感情を極力抑えたところで、頭をくだく、弾丸を摘出する。まるで日常の安逸をむさぼり馴れた人たちがどこかで糾問されるような、恐ろしい不可思議な現実感がある。広島の句には作者の心優しさがうかがえる。原爆という、いまわしい過去をもった広島の地を歩くとき、ちから強く闊歩することを憚るような気持ちになる。こころ弱い喜孝さんは「ご免なさい』と呟きながら爪先きだちで通りすぎるのであろう。何れの句もをの用い方に注目するが、三鬼の「広島の句」を考えると喜孝さんの広島の句はやや線が細い。掲出の句には喜孝さんの芯のつよさと類例のない逞しさがみえるようである。

ヴイクトリヤカンムリバトの海市かな
ウニヤラモクカンプリヤ紀のなみだかな

「カンムリバト」の句は他の作家にもあるが、この句のように一句の大半を鳥の名で埋めてしまうものば珍らしい。この二つの句の「かな」止めは、いくらか常套の感じがしないでもない。喜孝さんは、有季、定型という一定の枠のなかで自分自身を鍛えるということのほかに、こころの底に揺れうごく、いわばえたいの知れないものを何とかして見きわめようとする意志をもっている。それの手だてのひとつとして、言葉に興味をもち、言葉によって触発される、もやもやとしたものを何とか表現しようと辛苦するのである。こういった句が難解になってゆくことは避け難いが、ときには構成的な思念の香辛料のピリッときいた句に出逢うこともある。また、表現のアイディアに溺れ、生まの観念を露呈してしまうこともある。そんなこともあって「青寫眞」一巻の奏でる旋律は一様ではないのである。

しかし喜孝さんは、人間の心理を深く追求しようとして難解な句を生むということとはすこし違うものが感じられる。ある気紛れ的な要素から、普遍的な発想を逃れるという視点をみつけだしている場合もある．これは決して悪いということではない。気紛れ的といういい方は適切ではないが、そうとも思えるところから、ひとつの試みをもった句を探りだそうとしているのである。これはむしろ喜孝さんの手柄として受けとめていいと思う。ある試みをもった句であっても、ひとつひとつの句は、実に緻密な言葉の選択と、ゆっくりと時間をかけた推敲がなされている。「ヴイクトリヤカンムリバト」という美しい名の鳥に魅せられると、一週間でも、十日でもこのカンムリバトは喜孝さんの頭から離れなくなると推測できる。波郷が「恍惚」という旨葉に魅せられて、何とかして句にしてみようと苦心したという話を、何かの本で読んだ覚えがあるが、それと同じよろなものである。そして「海市かな」という下句にめぐり逢ったとき、喜孝さんの脳裡は、にわかに晴ればれとしたに違いない。句そのものの構成は単純なものであるが、この一句に対する喜孝さんの執念は並みのものではなかったと思える。言葉に対する反射的な、表層的な反応に恥即きながら、論理ということより、直接的な、クールな詩情を醸しだしていると思うのである。ウニヤラモクの句も、カンムリバトの句と同サイクルのものであるが、「なみだかな」は、やや溺れすぎの気配があり、喜孝さんのもっている遊びごころというものがみえるようでもある。

さあかすのけのあらものやにこものや

定められた枠のなかで鍛えるということは、惰性的な日常次元を基準とする守備範囲を生み易くなる。それよりも一歩でも前へ踏み込むとすれば、自分をもっとも苦しめるものを我慢し

なければならない。喜孝さんは、気に入った言葉、こころに触れた言葉にゆき逢うと、執拗にその書葉に執着してしまうようである。それは心象を追うというより、ある奇想をもって手際よく処理してしまうことがある。奇想といっても、俗にいう〝新しがりや〟の薄っぺらなものでなく、自分なりの文体を築きあげることを頭の中に置いているから奇想のなかにすっきりとした筋目がみえるのである。その奇想が、デリケートな詩的感応をよく支えているということであり、その不思議な能力をときどき垣間みせている。例えばアミダくじのように自分の思ったところから、全く予期しない、自分の意志とまるで関係のないところで、ひとつの結着をみせるということもある。こんなことをいうと、喜孝さんは「俺ばアミダくじで句を作ってはいないよ」という筈であるが、そういったものを素早く感じとるものを持っているのである。「青寫眞」にはこの特徴をよく生かしたものがある。それが今後の喜孝さんの可能性を予測させているように思える。そして喜孝さんが作家として伸びてゆくための、大きな主題をかたちづくるひとつの方法でもあるだろう。先きに述べた気紛れ的ということも、その奥底にきびしい知的な反芻があってのことでそれがなければ新しい俳句の領域はどこからも見えてはこないのである。掲出の「さあかす」の句は、二の会の席上で、率直なところ訳がわからなかった。俳句を如何に読むか、という問題が当然でてくる句である。「さあかす」、は先づわかるが、「けのあらものや」、「にこものや」、で思考が躓いた。けのあらもの、は例えば熊であるとか鹿であるとか議論されたが、作った本人は「いや、いいんです」とあまり喋らうとしなかったように思う。私などの狭い価値観の持ち主では到底及びもつかないような句であるが、喜孝さんの語彙の広さを思い浮かべると、だんだん訳ってくるような気がする。例えば、カンブリヤ紀とか、始祖鳥とか、白堊紀とか、光源氏、大宜津比売から、コンピュータまで幅広く多彩である。そういった

知識をもたないと、読者は己れの器量不足に泣かされることになる。喜孝さんは、俳句の言葉として縁のなさそうなものを、いかに創造の世界へもっていけるかというところに腐心している。ある場合には遊びとしてみえることもある。何れにせよ、誰の眼にも独自な作風として定着するには、もうすこし時間が欲しいということになるだろう。このさあかすの句は「……サーカスの音楽にのって芸をする動物たちのすがたを、神の生贄にささげられる「毛鹿」にたとえ、それを見物し、たのしみながら飲食するさまを「柔物」とみたてたのであろう。」という高島茂さんの解説でよいのであろう。

「青寫眞」のなかには、現実の深部へ浸透する一歩手前のところで、喜孝さんひとりが悦に入っているようなものもある。「をはりなきとしりてせせらぎづかれかも」「橡の花根のうつくしくありなむや」「奇型魚のまんまと売られおほせけり」などの句である。また表現技術は確かであっても、何かが不足と思える句も多い。しかし「青寫眞」のなかにみえはじめてくる構図のふしぎさ、日常の常識をはぐらかす面白さ、そういったもののなかに喜孝さんの面目をみる思いがするのである。それが将来どのように変貌するか、全く予測のつかない乙とであるが、暖流の旗手のひとりとして、喜孝さんがすでに持っている技術の上に更に、喜孝さんにもっとも相応しい喜孝さんの文体の確立を望みたいのである。

次の句を書くつもりだったが紙数がなくなった。

春の蒲團昔は韓と陸つづき
とびそめしもんしろてふのあしのうら
せきれいやうすらひのはしみづがのる
水の上に波といふもの半夏生
凍鶴に一聲分の息浮かぶ

（『暖流』一九八二年三月号より転載）

道

切通し

秋川泉

コロナ禍の籠もる日々の中、安行に行くようになった。我家からは遠いのでめったに行かない土地であった『川口市安行』。安行原あたりから安行領家そして、一輪草の森の脇の道が切通しの長い坂になってゐる。私はここをバイクで行ったり来たりするのが好きで、安行で一番好きな道である。子供時代、小学校は山の分校で、その脇にある道が赤土の深い谷になっている切通しであった。鎌倉も近く、切通しが多くあり、とにかく、切通しの道に郷愁を覚える。

また安行の切通しに行きたくなった。

道

大日向幸江

私はどんな道でも好きだ。
自分の夢をかなえる道。
細い道。
家族に会える道。
どんな道でも迷路はある。
だから人生は千差万別。
選んだ道には必ず答えがある。

好きな道

篠田純子

好きな道は、南北に走る「昭和通り」です。歩道は広く毎日通勤、買物に、自転車で快適に走っています。時には浜離宮や、不忍池まで足を伸ばします。東西に走る「鍛冶橋通り」も好きな道で、日比谷公園や有楽町へ行く時、遠回りしてでもこの道を走ります。子供の頃は、永代橋から目黒まで都電が通っていて、麻布十番の叔父の家に行くのに、鍛冶橋通りを通った思い出があります。

下谷から麻布まで

篠田大佳

歩く道それぞれに思い入れがあるので、一つには絞りきれないですが、落語の「黄金餅」という演題で、下谷から麻布までの道中付けがあって、その道をなぞっていったことがあります。東京では暗渠になっている川が多く、例えば、神田と日本橋の境界も暗渠になっていて、中央通りの境界の橋を今川橋といいます。

下石神井日録 5

佐藤喜孝

一月号の表紙は、図書館への道すがらのスマホ写真。塀越しに蝋梅を咲かせてゐる家がある。見慣れた花だから確か蝋梅だとおもふが黒いものが沢山ぶら下がって異様。家に帰って調べたらやはり蝋梅。黒いのは実、実は毒があるとのこと。だから今まで蝋梅を管理してゐた人が処理してゐたから実を見かけなかったのだと、勝手に了解した。この蝋梅の主は知らないのかもしれない。

ついでに歳時記に実の事がどの様に書かれてゐるかと思って、

『ホトトギス俳句季語便覧』【臘梅】葉の出る前に小さな香りの高い黄色い花が数個ずつ集まって咲く。梅とは別種・唐梅ともいう。

『角川合本俳句歳時記』【臘梅】ロウバイ科の落葉低木、中国原産で唐梅ともいう。高さ二～五メートル、葉は卵形で対生する。一～二月、葉が出る前に香りの良い黄色い花を下向きまたは横向きに開く。

二冊とも蝋梅ではなく臘梅であった。また実の事は何も書かれてゐない。不思議なおもひがした。

ついでに臘梅の実のことを、【痙攣を誘発するカリカンチンという物質を含んでいるとか。有毒ということは、何か薬効はあるのでは?と調べてみたが、干した蕾は「蝋梅（ろうばい）」といい、鎮咳（ちんがい）や解熱、火傷に効果があるらしく、東南アジアでは高級な薬として利用されているようだ。実には種として利用する以外には利用価値は無い。】とのこと。どのやうな実が成るのか楽しみ。

二月号の表紙は近くの『井草の森公園』公園内の丘を登ったら菜の花が咲いてゐた。よくこんな寒い時に咲かされたものだと同情したが一足早い春の訪れを堪能した。この公園は広いのでまだ端っこしか歩いてゐない。池もあるらしい。本格的な春を待ってゐる。

あをキーワード俳句辞典（ほし―ほそ）

星

星あかりやもりの声の鳴きやまず　吉成美代子
原爆忌いつかは消ゆる水の星　木村茂登子
回遊魚数多の瞳星流る　大日向幸江
コスモスの地上にありて星のごと　井上　石動
太棹をくどく厚撥星冴ゆる　佐藤　恭子
縄文の星を見つめむ去年今年　田中　藤穂
枯葉舞ふ西空巨き星を揚ぐ　田中　藤穂
星空へ右手に掲ぐる大熊手　佐藤　喜孝
蝶はバラ科そしてわたしは裏星科　篠田　純子
ハープで弾く「きらきら星」やゑのこ草　定梶じょう
流れ星夜釣の竿の鈴が鳴り　井上　石動
爪に星のせて完璧はるゆふべ　大日向幸江
空一杯星の数ほど苺食ぶ　田中　藤穂
梅雨の星使途不明なる鍵二つ　佐藤　恭子
二ツ星そそとそそとや雲流る　須賀　敏子
疾走の能登の千里浜星流る　田中　藤穂
蛍火のしづまりてまた星空に　秋川　泉
短夜や見える見えぬと星談義　佐藤　恭子
またたきて星をさそひし蛍かな　秋川　泉
七夕や輝く星の大往生　須賀　敏子
八月やむのたけじさん星になる　田中　藤穂
氷張る西空大き星を上げ　井上　石動
夕べ星甲斐善光寺青葉風　秋川　泉
東京の都議選すんで梅雨の星　大日向幸江
クリスマス市ドイツの星の逞しさ　長崎　桂子
冴返る星を仰ぎて雨戸引く　佐藤　喜孝
この星に足をかけたらぐらつけり　須賀　敏子
贅沢に星を散らして天幕村　佐藤　喜孝
お隣の星にあいさつもうして居　七郎衛門吉保
温暖化二星の間に溜り水　定梶じょう
ながれ星その時猫の耳うごく　赤座　典子
一人居や句のきっかけと星冴ゆる　大日向幸江
銀の星爪に描くや生姜酒　佐藤　喜孝
ひからない星もあまたに初まゐり　定梶じょう
チャルメラや糠星かうも冴えかへり　佐藤　喜孝
その中の一つの星が辷りだす　佐藤　喜孝
天球の星それぞれにうごめける　佐藤　喜孝
縄文の泉をむすび木漏星　赤座　典子
流れ星確かめ戻る山の宿　佐藤　喜孝
赤星天道七星瓢蟲日だまりに　秋川　泉
息をのむ冴ゆる空より星の降る　秋川　泉
頬にささる空気きりきり流れ星　秋川　泉
息をのむ冴ゆる空より星の降る　秋川　泉

明の星ドアのむかふにミャーの声　秋川　泉

補助

花曇テープぐるぐる足の補助　長崎　桂子
補助輪を外す時なり風薫る　大日向幸江

暮色

東京は光の巨人冬暮色　須賀　敏子

ボス

突然にボス猿叫び冴返る　篠田　純子

ポスター

迷ひ犬のポスター揺るる夜寒かな　須賀　敏子
美し国伊勢のポスター鮑海女　長崎　桂子
上田吉二郎のポスターにある涼しき字　佐藤　恭子
猫探すポスター見たり花の中　須賀　敏子

ポスト

人影のなき家のポスト梅雨菌　早崎　泰江
ポストまで朝寒頬に張りつきて　田中　藤穂
朝寒やポストへ行くも小走りに　鎌倉喜久恵
薄紅葉昭和のポスト褪せて立つ　長崎　桂子
遠道をポストまで行く夜の秋　早崎　泰江
初しぐれ子規の家にはポストがない　佐藤　喜孝
梅雨の月青きポストに投函す　篠田　純子
ポストまで百歩の並木秋の声　田中　藤穂
炎天の一点景としてポスト　定梶じょう
木枯に身を押されつつポストまで　田中　藤穂
小走りにポストにむかふ今朝の冬　赤座　典子
星月夜髪ととのへてポストまで　芝　尚子
托鉢や深雪のポストかへりみる　定梶じょう
ポストに手ふかぶか入るる春の宵　佐藤　喜孝
大輪の朝顔ポストのぞくかに　早崎　泰江
今朝秋のポストの色が怪しからぬ　定梶じょう
夕焼くる郵便ポスト立つかぎり　定梶じょう
暮れいそぐポストの他は色なき街　森　理和
懐かしきポスト置く宿春惜む　佐藤　恭子
立春やポストの背より少しだけ　赤座　典子
駐車場に小さきかまくら丸ポスト　長崎　桂子
新緑や厳めしい昭和のポスト　定梶じょう
ポストなど掘りだしてある深雪晴　赤座　典子
読みきれずポストへ返す暮の春　秋川　泉
春嵐郵便ポスト在りし跡　田中　藤穂
葉桜やポストまでゆく髪梳かす

墓石

冬日さす墓石綺麗に並びゐる　吉成美代子
背流すやうに墓石を春彼岸　森　理和

墓前

彼岸入墓前の息子ぎこちなく　森　理和
松落葉信玄公の墓前まで　田中藤穂

白木槿五十年忌の墓前かな　芝宮須磨子
妃殿下の墓前に傳く冬帽子　大日向幸江

舗装

逃水の舗装道路のゆらぎゆく　早崎　泰江
つややかな芒の穂なり舗装路なる　佐藤　恭子
草取りや舗装路に尻餅をつく　長崎　桂子
暮しある舗装の割目冬の草　遠藤　実
舗装なき昔を殘す風薫る　長崎　桂子
舗装路の小川となりし秋出水　長崎　桂子
舗装路の継目いとはぬ曼珠沙華　長崎　桂子

細き

細き枝花元気なり臥竜梅　赤座　典子
桟細き腰高の窓小鳥来る　篠田　純子
藍浴衣うなじの細き母なりし　芝　尚子
沈丁花会ひたくて入る細き道　長崎　桂子
食細き人に里芋飴色煮　赤座　典子
細き枝撓ふ石榴に足を止め　鈴木多枝子
薮山に細き道あり東風通る　鎌倉喜久恵
新涼や白き二ノ細き腿　東　亜未
骨壺へ細き骨入れ石蕗の花　田中　藤穂
民宿街細き氷柱の連なれり　赤座　典子
葉の間の細き枇杷の実黝し　赤座　典子
きのふより細き月あり闇ひろがる　佐藤　恭子
白く細き指ひよんの実を吹く女　木村茂登子
細き上に赤逞しき彼岸花　赤座　典子
子羊の細き尾揺らし親を追ふ　佐藤　恭子
初下ろし細き柾目の利休下駄　赤座　典子
椿冬芽細き螺旋の天を指す　須賀　敏子
細き人太き人にも夏来る　田中　藤穂
路細き谷中寺町天の川　須賀　敏子
秋晴やクライミングの細き綱　田中　藤穂
春寒し阿修羅の像の細き腕　森　なほ子
雑木紅葉見晴台へ細き径

細く

ひぐらしの声細くなり地に沈む　渡邉　友七
菜の花や川細くなり太くなり　早崎　泰江
山沿ひの急流細く豆の花　芝　尚子
冬の梅末吉細く畳みをり　東　亜未
挿す瓶の首が細くてチューリップ　定梶じょう
寒天に月細く細くありにけり　須賀　敏子
日暮よりか細く鳴くや秋の声　長崎　桂子

細め

細めビル狭間身を細めつつ秋落暉　松本　米子
八十翁目を細め見る雲の峰　東　亜未
傘細め八手の花にふれてゆく　佐藤　喜孝
ついに買ふ細めのパンツ十二月　斉藤　裕子

あとがき

「やぶにらみ記」について

私の句集『青寫眞』評を『暖流』一九八二年三月号より無断で再録させていただきました。改めて読んで私が一歩も前進してゐないこと、私より私のことをよく知ってゐることに驚きました。私の作品は雑排の類ひかもしれないなあと読み返しました。評をお願ひしましたがへんてこりんな作品に困り数人に断られました。評を書いていただける人がゐず困ってゐるのを知り重い筆を執っていただいたことをありがたく思ひ出しました。この句集はネットに置いてあります。「やぶにらみの記」で句集に興味を持っていただければこんなにうれしいことはない。

筆者の亀田虎童子様は『萱』主宰。縁あって三月号より作品を『あを』にご寄稿頂けることになりました。うれしき限り。虎童子様は大正十五年生。六月で九六歳になられる。『萱』には堀内一郎さんが在籍してをられました。田中藤穂さんと大日向幸江さんも『暖流』のお仲間。小さな俳誌ですが『暖流』人が四人も句を発表してゐる不思議をおもひました。俳句から手足を出してしまった様な拙句を温かい目で見守っていただいた瀧春一先生・高島茂様・亀田虎童子様そして佐藤恭子に改めて頭が下がる思ひです。

随筆のお題「名前」

小学校へ入学した時、持物などに自分の名前がめったやたらと書かれてゐたり、名前を書くことが増えたことが唐突に甦った。名前を意識しはじめた最初であらう。皆様も自己の名前、子供の名づけなどいろいろな思ひ出でがおありかと。短くとも長くともかまいません。お待ちしてます。（喜孝）

二〇二二年二月号
発行日　二月二十日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番　018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）